



フランス語における若者ことば verlan の言語学的・社会的アプローチ

著者	比内 晃介
雑誌名	筑波大学フランス語・フランス文学論集
巻	33
ページ	1-19
発行年	2018-12-25
URL	http://hdl.handle.net/2241/00154234

フランス語における若者ことば *verlan* の言語学的・社会的アプローチ

比内 晃介

1. はじめに

verlan とは、フランス語において単語や語句を区切り、それらの位置を前後転倒させることで新語を作る造語のことであり、1980年代初頭からフランスで特に若年層における一種の言語・社会現象として認識されるようになった。*verlan* の語彙や表現は *meuf* (femme : 女、女性)、*chelou* (louche : いかかわしい)、*ouf* (fou : 気の狂った)、*laisser béton* (laisser tomber : 見捨てる) など数多く存在し、また筆者が実施した質問紙調査によると中学校や高校生をはじめとする青年層が現在でもなお *verlan* を若者ことばとして多用している。

本研究ではこの *verlan* を研究対象とし、若者ことばとしての *verlan* が持つ言語創造性について、発話コンテキストに焦点を当てた分析と考察を実施する。ここでの言語創造性とは、つまり既存のことばとは異なる新しいことばやコミュニケーション・スタイルを生み出す力のことであり、*verlan* を使用する話者、とりわけ若者の持つ「能力」とも言える。

2. フランス語の若者ことば : *verlan*

言語には多様な形態や使用が存在し、現在までにその多様性に着目した研究は多数実施されてきた。言語の多様なあり方は、例えば方言や地域言語のように場所・空間によって決定されることもあれば、発話者自身や彼らが所属する共同体の年齢層や社会階層によって規定されることもある。フランス語の場合も同様に、フランス国内外の地域によって *patois* (俚言) や方言、特有のアクセントが存在するだけでなく、移民の出自を持つ話者や若者に使用されるフランス語をはじめとする、話者個人の社会・文化的特性によって変容するフランス語やコミュニケーション・スタイルも現れる。本研究で扱う *verlan* は、まさにこの後者によるところが多く、「若者ことば」というフランス語の多様性の一つであると言えよう。

verlan が若年層に固有の言語現象としてフランスで注目され始めたのは1980年代で、当初は主にパリ郊外 *banlieue* に住む若者が使用することばとして認識されていた。しかし、報道や広告等のマスメディアによって *verlan* への認識がフランス全土に広がり、さらにロックやラップ等の音楽の影響も受けながら、やがてパリ郊外以外の地域に住む若者たちも *verlan* を使用するようになったと考えられる。事実、筆者が2016年にフランスのフランシュ＝コンテ地方で実施した *verlan* の使用に関する質問紙調査によると、調査対象者がパリ郊外に住んでいないにも関わらず、特に中学生と高校生を中心に多くの *verlan* を使用する話者が見られた。また *verlan* を現在もなおパリ郊外に住む若者が使用することばと認識している者は少なく、一方で「若者ことば」として *verlan* を捉える者が多数派であった。¹このように *verlan* はフランス語における若者ことばというある種

¹ « 12. Pensez-vous que le *verlan* est un usage de jeunes ? » に対して *Oui* : 81.3%, *Non* : 17.5, *Réponse nulle* : 1.2% であり、« 13. Pensez-vous que le *verlan* est un usage des « banlieues » des « quartiers » ? » に対して *Oui* : 31.5%,

の言語イデオロギーを獲得してきた。しかしながら、これまでの *verlan* に関する研究は、*verlan* の話者がパリ郊外の若年層であることを前提とし、彼らの文化・社会背景に言語事象を関連づけながら考察するものが中心であり、フランス全体に定着した若者ことばとして *verlan* を考察の対象にしているものは少ない。本研究では後者の *verlan* に目を向け、現在フランス語における若者ことばとして認識される *verlan* とその発話者が持つ言語創造性について考察することを目的とする。とりわけ実施した調査によって明らかになった、若年層で特に使用頻度の高い *verlan* の語彙である *chelou*、*ouf*、*relou*、*meuf* に焦点を当てながら分析を進めたい。

3. 意味論・語彙論的視点から分析結果と課題

verlan について研究を行う上での重要なことの一つに、規範にしたがった標準フランス語の語彙や表現を区切り、転倒させて *verlan* を作り上げることによって、元の語からどのような意味変化が生じるのかを解き明かすことが挙げられる。パリ郊外で *verlan* が言語現象として注目され始めた 1980 年代、*verlan* はスリや麻薬などの反社会的行動に精通している非行集団で使用される傾向にあったため、暗号的機能 *fonction cryptique*²つまり所属共同体以外の人々に理解されないための隠語としての性格が強かった。しかし、マスメディア等でフランス社会の前に *verlan* の存在が暴かれ、拡散されてしまった結果、この機能はほぼ失われていくこととなる。しかし、その隠語としての使用価値が消失したのにも関わらず、*verlan* が現在もなおフランスにおいて若者ことばとして広く使用されているのは、*verlan* に元の語とは異なる意味で使用するによってもたらされる、ある特定の効果が付与されているからでないと推測される。では、果たして *verlan* は元の語とは異なる意味を持っているのか、異なる意味が存在するのであれば、どのような異なる意味を持つ傾向にあるのかについて考察する必要がある。そこで、比内 (2017) では *verlan* について意味論・語彙論的な視点を導入した分析と考察を実施している。具体的には、採集した *verlan* の用例を使用し、転倒前の語とその *verlan* の意味論的レベルでの比較を行っている。その際に、基語の意味には仏辞書 *LE PETIT ROBERT*、*verlan* の意味には、ウェブサイト *Le Dictionnaire de la Zone*³を参考にした。まず、前述した *verlan* の中でも使用頻度の高い語彙である、*chelou*、*ouf*、*relou*、*meuf* の分析結果を以下に記したい。

3.1. *chelou*

基語 : *louche*. adj (形容詞)

- ① Qui est atteint de strabisme.

(斜視を患うもの)

- ② Qui manque de clarté, de transparence.

(明瞭さ、透明度を欠くもの)

Non :68.1%, Réponse nulle :0.4%であった。

² Bachmann & Basier (1984), p.172.

³ *Le Dictionnaire de la zone* : <http://www.dictionnairedelazone.fr/>

③ Qui n'est pas clair, pas honnête.

(明白ではない、正直ではないもの)

chelou: adjectif. louche, douteux, bizarre. (形容詞：疑わしい、奇妙な)

(1) Mais depuis peu il est **chelou**, il a des délires mystiques (MOKLESS, « Stp Carla », Le Poids des mots, 2011)

(2) C'est **chelou** | Cette façon qu'elle à de te regarder | C'est quoi cette manière de t'appeler bébé ? (ZAHO, « C'est chelou », Dima, 2008)

辞書記述を比較すると、*LE PETIT ROBERT* で記述されている③「明白または正直ではないもの」つまり「怪しげな」「いかがわしい」という基語の意味が **verlan** へと変化した後にもほぼ引き継がれている。しかしながら、**verlan** である **chelou** の意味はむしろ形容詞 **bizarre** の指示する「奇妙な」という意味が濃く表れていることが注目される。

3.2. ouf

基語：fou

I. n. fou. (名詞)

① Personne atteinte de troubles, de désordres mentaux.

(気のふれた人)

② Bouffon qui était attaché à la personne de certains hauts personnages.

(王侯に仕えた道化)

③ Personne qui, sans être atteinte de troubles, de désordres mentaux, se comporte d'une manière déraisonnable, extravagante.

(精神的な混乱や動揺に関係なく、常軌を逸した人)

④ Homosexuel efféminé. (〈女装した〉同性愛者)

⑤ Personne d'une gaieté vive et exubérante. (陽気な人、はしゃぐ人)

[...]

II. adj. (形容詞)

① Atteint de désordres, de troubles mentaux. (気のふれた)

② Qui est hors de soi. (自分を失った)

③ Fou de (qqn, qqch) (…に夢中になった)

④ Qui agit, se comporte d'une façon peu sensée, anormale.

(〈言動などが〉異常な、常軌を逸した、無謀な)

[...]

ouf : adjectif et nom. fou, dérangé (形容詞、名詞：混乱した)

(3) La vie c'est pas dur, c'est l'homme qui rend ouf | La femme qui rend ouf | L'argent qui rend ouf
(KAMELANCIEN, « Le Charme de la tristesse », Le Charme en personne, 2007)

(4) Pas besoin de faire le ouf, j'ai mon peura pour vous terrifiez (SULTAN, « On les emmerde feat. Canardo », Soult #1, 2011)

実際の *ouf* の意味は基語 *fou* の指示内容ほど具体的に分岐しているわけではなく、名詞としては「気のふれた人」「常軌を逸した人やもの」、形容詞としては「気のふれた」「常軌を逸した」という意味で使用されており、指示内容の拡張が観察される。また *fou* の持つ否定的な意味の中立化が進み、結果 *ouf* の方が *fou* よりも肯定的な意味を含意しやすいことがわかる。

3.3. relou

基語 : lourd

I. maladroit (不器用な) .

① Qui manque de finesse, de subtilité; qui est, intellectuellement et physiquement, incapable de réagir vite et bien.

(精巧さ、鋭敏さを欠くもの；知能的に、身体的に素早く的確に反応することができないもの)

② Qui manifeste de la lourdeur, de la maladresse intellectuelle.

(知能的にのろまで、不器用なもの)

③ Qui se déplace, se meut avec maladresse, gaucherie, lenteur.

(不器用に、ぎこちなく、鈍く動くもの)

II.

① Difficile, pénible à porter, à déplacer, en raison de son poids.

(重い：重量が理由で、持つことや移動させることが難しい)

② Dont le poids est élevé ou supérieur à la moyenne.

(平均よりも重量のある)

③ Qui agit avec force et violence. (暴力的にふるまう)

④ Grand. (大きい)

⑤ Qui accable, oppresse et pèse.

(押しつぶし、息苦しくさせる、つらい)

⑥ Lourd de : chargé de. (〈精神的・肉体的に〉重苦しい)

⑦ Qui donne une impression de lourdeur, de pesanteur, sur les sens.

(重々しい感じの、だるい)

⑧ Adv. Beaucoup. (形容動詞：たくさん)

relou: adjectif. lourd, ennuyeux, embêtant.

(形容詞：退屈な、うんざりする)

(5) Ça fait longtemps que t'es **relou** avec t'es histoire de rap (FIZZI PIZZI, « À Part Jacter », Pas de grisbi pour un CD, 2012)

(6) Tout ce qui me prend la tête me tient à cœur c'est bien **relou** (LADEA, « Avec le cœur feat. L'indis & Nakk », Qui veut ça ? Volume 2, 2012)

基語の *lourd* に比べて *relou* には、物理的な「重さ」よりも精神的な「重苦しさ」や「退屈さ」を指示する強い傾向がある。つまり *relou* の指示内容が、基語の意味の「だるい」「つらい」という意味へと限定された結果であると推察することができる。

3.4. meuf

基語：femme

I. Être humain appartenant au sexe féminin qui peut, lorsqu'un ovule est fécondé, porter l'enfant jusqu'à sa naissance.

(卵細胞が受精した際、出産まで胎児を保持することができる女性に属する人類)

II. Femme unie à un homme par mariage.

(結婚によって男と結ばれた女性：妻)

III. Domestique. (召使い)

meuf: nom. fem (女性名詞)

① Femme, fille. (女性、女の子)

(7) Lundi, j'voudrais une **meuf** du 91 qui kifferait mes refrains. (LA FOUINE, « Quelque chose de spécial feat. Eilijah », Bourré au son, 2005)

(8) Je joue pas d'la flûte, demande aux **meufs** qu'elle est mon instrument (SULTAN, « Chapka », Des jours meilleurs, 2012)

② Copine, petite amie. (〈女性の〉恋人)

(9) Tu ne respectes plus ta mère, ni ta sœur, mais ta meuf avant tout (SEFYU, « Un point c'est tout feat. Mina, Sana & Zaho », Qui suis-je ?, 2006)

(10) J'ai pas frappé ta meuf, j'lui ai seulement mis des coups de couilles (HOUSS WAYSS, « A4 Remix », Houss Wayss, 2012)

femme の verlan である *meuf* は、本稿で扱う verlan の中で唯一の名詞的用法しか持たない例である。用例 (7)、(8) からわかるように、*meuf* は「女性」という基語の意味を保持しているが、一方でより若い「女の子」、換言すればフランス語での *fille* が持つ意味を指すことができる。また (9)、(10) では *meuf* が「(女性の) 恋人」として使用されている。これは *femme* が「妻」を指示することに類似している。最後に、基語 *femme* に比べて *meuf* は全体的に侮蔑的な意味合いが強くなる。

ここまで辞書記述を中心に基語が転倒し verlan に変化した後でどのような意味変化が生じるかについて考察して来た。その結果、基語が verlan になることによって生じる意味レベルでの大きな四つの変化を下記のように仮定することができる。

- A) 基語の意味範疇からある特定の意味のみが色濃く verlan の指示内容に現れる傾向がある。
例) *chelou*、*ouf*、*relou*、*meuf*
- B) 指示内容が指示対象の具体的な形容よりも、発話者の感情表現へと変化しており、指示内容の主観性が高まっている。例) *ouf*、*relou*
- C) verlan に引き継がれる意味の中立化が進むため、指示内容がコンテキストに依存しやすくなる。例) *ouf*
- D) verlan 全体を通して俗語的な印象が付随するため、使用することが可能な場面が限定される。
例) *chelou*、*ouf*、*relou*、*meuf*

上記の意味変化の特徴を考察すると、辞書記述のみでは verlan の指示内容とその変化を十分に把握しきれないことが明確である。特に B)、C)、D) に挙げたように、verlan の指示内容は実際の発話場面の中での発話者の感情やコンテキストによって決定される傾向にあることがわかる。したがって、実際の社会実践としての言語活動の中で verlan がどのように使用されるのか、どんな場面で使用されるのか、なぜ使用されるのかを考察することによって、verlan の転倒による意味変化、加えてその使用効果を解釈することが可能になるだろう。

4. 発話コンテキスト分析の重要性

前節で既に言及したように、verlan の言語創造性を考察する上で verlan が使用される場面やコンテキストを考察することは必要不可欠である。その証拠として、発話コンテキスト分析の重要性を示唆する verlan の例を以下に示す。この例は、Facebook のコメント欄内でのフランス人同士のやり取りである。この二人の話者は Facebook 内で友人関係にある。また匿名性を保つために M1 の名前である部分は XXXX によって伏せている。

(11)

(Facebook 上に投稿されていたあるイラストに関する女性 F1 から男性 M1 へのコメント)

F1 : XXXX, les x-men avec le dessin chelou que tu aimes bien je crois

M1 : Ohhhh l'histoire est tellement ouf

(12)

(Facebook に投稿されていたあるビー玉の動画に関して、F1 から M1 へのコメント)

F1 : XXXX, LA bille !

M1 : trop fou!

(11)、(12) の会話を考察する上で非常に興味深いのは、同一の発話者と対話者によるやり取りであるのに関わらず、発話者 M1 によって fou とその verlan である ouf の使い分けが生じていることである。コードスイッチングに類似しているこの現象がなぜ生じるのかについてやはり十分に考察する必要がある、当然ながらそのためには語・表現の指示内容を実際のコンテキストや場面と照らし合わせながら分析するべきである。実際にパリ郊外に住む若者による言語相互行為を研究した Dannequin (1999) は以下のように述べる。

Dans une perspective sociolinguistique, aucun énoncé, aucun terme choisi par le locuteur n'est le fruit du hasard. Chaque composant du comportement langagier [...] doit être analysé dans le contexte où il se produit. (Dannequin 1999 : 90)

社会言語学的な観点では、話者によって選択された、いかなる発話文もいかなる単語も偶然の代物ではない。言語行動の各構成要素が、それが作られたコンテキストの中で分析されなくてはならない。(筆者訳)

5. 問題提起

本研究の大きな目的はフランス語における若者ことば verlan の持つ言語創造性について分析と考察を実施し、結果を記述することである。そこで本稿では特に実際の会話内で verlan が使用される際のコンテキストや場面に注目し、発話者－対話者間の相互行為の中で verlan がどのように機能しているのか、どのような効果を発話者は期待しているのか、verlan の指示内容や発話者と

対話者の関係にどのような変化が生じているのかを記述し、考察することを目的とする。

6. 分析と考察

本稿の調査にはフランス語の話し言葉コーパスデータである *ESLO (Enquêtes Sociolinguistiques à Orléans)* を使用した。分析した会話データは、全て 2012 年の 11 月にオルレアン市内または近郊で収集されたものであり、また *verlan* を使用する発話者は全員 15 歳から 25 歳の若年層である。ただし、分析に使用した会話のトランスクリプトに関しては、*verlan* の使用にかかわる発話コンテキストをより具体的に記すため、発話のタイミングや笑い等の情報を筆者が音声データをもとに転写して加えている。筆者が転写したトランスクリプト記号に関しては本稿末に記載した一覧を参考にされたい。

本調査では、*verlan* (*chelou*、*ouf*、*relou*、*meuf*) が発話されている場面やコンテキスト、発話者と対話者の様子を細かく観察したことによって、*verlan* の使用が顕著に現れる場面に関するある程度の統一性を見出すことができた。次節以降では、*verlan* の発話に関わるこれらの場面について、実際の会話データとともに考察を加えたい。

6.1. 親密性

ここでの親密性は、根本的に *verlan* の持つ社会的機能の一つである識別的機能 *la fonction distinctive*⁴に関連している。この機能は、ある特定のことばやコミュニケーション・スタイルを所属グループ内のみで共有することで、他集団から自分たちを差別化し、共同体への所属意識を強化するためのものである。しかし、実際に分析した会話データ内の *verlan* はこの機能のものと少し様態が異なり、発話者と対話者の関係が親しいことを示すマーカーとして、*verlan* が機能しているのではないかと考えられる例がいくつか見られた。先に述べたように、基語が *verlan* に変化することによって、指示内容全体に俗語的な印象が付与され、*verlan* は侮蔑語として解釈される傾向が強まる。つまり先生や初対面の人と会話を交わすような、公的でフォーマルな場面で *verlan* を使用することは、かなり特殊な場合を除いて、ほぼ皆無である。一方で、Dannequin (1999) は「最悪の侮辱語であっても、それがグループによって既知で、評価されている相互行為の一部である場合には、悪口として捉えられることはない」⁵と述べる。つまり、グループ内での暗黙知として了承されている *verlan* であれば、たとえ俗語的な指示内容を持っていたとしても、むしろ発話者と対話者の親密性を高める効果を発揮すると考えられる。以下の例から考察してみる。

(13)

(以下は男女二人ずつの友人同士による食事の場面での会話である。女性 RN166 は一度ビールを欲するが、ビールの本数が足りないことがわかり、最終的に自分はビールを飲まないと主張を撤回する。しかし男性 MQ293 が RN166 のこの主張に納得できずにいる場面である。)

⁴ Bachmann & Basier (1984), p.173.

⁵ Dannequin (1999), p.87.

DR381: tu veux une bière ?
 RN166: oui
 RN166: [c'est une bière à quoi ?]
 DR381: [mais y en a qu'une]
 RN166: ah non alors
 MQ293: bah non mais c'est bon si y en a qu'une euh je vais pas tout boire hein=
 DR381: = [vous pouvez partager] une bière
 RN166: [mais si non vas-y]
 RN166: non vas-y j'en veux pas
 MQ293: mais C'EST BO:::N=
 RN166: =mais ÇA VA j'en veux pas déstresse
 MQ293: >¥pourquoi t'en veux pas alors qu'à l'instant t'en voulais?¥<=
 RN166: =mais parce [que ça va]
 MQ293: [mais ARRÊTE]=
 RN166: =je veux te la laisser
 →MQ293: mais t'es *ouf*
 RN166: mais j'suis gentille c'est tout
 MQ293: (mais) c'est pas de la gentillesse
 RN166: ¥bah si¥

(ESLO2_REPAS_1260)

男性 MQ293 の笑いを含んだ疑問文 (¥pourquoi t'en veux pas alors qu'à l'instant t'en voulais?¥) が示しているように、MQ293 は決して喧嘩腰で女性 RN166 に発話しているわけでない。また→で示した MQ293 の発話文では、*ouf* という *verlan* によって RN166 が形容されている。辞書通りの意味では「常軌を逸した人」「気のふれた人」を指示する *verlan* が、ここで形容詞として使用が可能なのは、この二人の話者が親しい関係にあるという条件が満たされているためだと考えられる。

(14)

(以下は父と母、息子二人、娘一人の食事における会話である。息子の一人 FH449FRE2 がサッカーに出かける前はご飯を食べないという習慣から、この食事の前も長く食べ物を口にしていないということがわかる場面である。)

FH449PER : ah >ça recommence toujours avant de partir< euh au foot hein
 FH449FRE2: hm
 FH449FRE1: >t'avais pas mangé avant?<

FH449FRE1: (la) dernière fois?

FH449FRE2: non

→FH449FRE1: t'es un *ouf* toi=

FH449: =il mange jamais avant d'aller au foot

(ESLO2_REPAS_1266)

上の (14) において、→で示した男性 FH449FRE1 の発話は、その場にいる父や母、娘ではなく、男兄弟である FH449FRE2 に向けられている。この場面でも同様に、まず *verlan* を使用する上での前提である「若さ」をこの二人の話者が満たし、さらに両者の仲が親しいために *verlan* である *ouf* によって対話者を形容することが可能になっている。事実、この会話データの中で、父 FH449PER による *fou* の使用が複数回見られるが、反対に *ouf* の発話は一度も観察されていない。

(15)

(以下は男女二人ずつの友人同士による食事の場面での会話である。ある食材の味に違和感を覚えた三人 DR381、MQ293、RN166 がその場にきた女性 BV647 に味見を促している場面である。)

DR381: tu veux goûter Joy?

BV647: >non<=

MQ293: =non mais GOÛTE parce que comme ça au moins

MQ293:[on aura un témoin avec plus de poids]

→RN166: [ah non mais franchement goûte *meuf* franchement goûte]

MQ293: (auprès)

RN166: goûte

(ESLO2_REPAS_1260)

さらに (15) の会話では→で示したように、女性 RN166 が *meuf* という *verlan* によって同じ女性 BV647 を呼びかける場面が見られる。これは *meuf* が名詞としてではなく呼称として使用されていることを示しているが、俗語的な意味が付与された *meuf* で相手呼びかけることは、一見すると失礼な行為のように思われる。しかし、繰り返しになるが発話者と対話者の間で暗黙知として了承されている侮蔑語の使用は、むしろその二人の間の親密性を高めたり、確認し合ったりする機能を果たしていると考えられる。

6.2. 共感性

会話データの中には、発話者と対話者が親しい間柄にあるという会話の前提的な場面だけではなく、発話者と間話者の間である話題に対する意見や評価、感情が一致しているというコンテキストにおいて、*verlan* の使用が誘発されていると考えられる例も見受けられた。この発話コンテ

クストは、発話者と対話者が相互行為としての会話を作り上げる中で生まれる「共感性」と深い関係にあると筆者は考える。以下で具体的な例を観察してみる。

(16)

(以下は男女二人ずつの友人同士による食事の場面での会話である。ある小説について男性 DR381 が女性 RN166 と男性 MQ293 にその小説について説明している場面である。)

MQ293: y en a plein attends hé

DR381: [ouais celui avec] [Keira Knighthley]((en même temps))

RN166: [bah je sais pas celui avec euh] [Keira Knighthley] ouais=

RN166: =voilà

MQ293: ouais je j'connais [pas]

→DR381: [tant pis] tu sais la meuf

→MQ293: ouais celle qui gueule à fond euh court euh Guenièvre c'est une barbare euh c'est que

MQ293: complètement con quoi=

BV647 : =[ouais]

RN166 : [voilà]

(ESLO2_REPAS_1260)

初めの→で示した発話内では、男性 DR381 がある小説の登場人物の女性を *meuf* と形容しており、彼が抱いているこの女性に対する侮蔑的な姿勢が垣間見える。そして男性 MQ293 も直後の発話でこの女性の行為を *gueuler* という俗語動詞で指示していることから、この DR381 と MQ293 の二人の間でその女性に対する評価が一致しているということがわかる。このように、発話者と対話者間の共感性が高まるにつれて、*verlan* の使用が誘発されやすくなるということが考えられる。

(17)

(以下は男女二人ずつの友人同士による食事の場面での会話である。男性 DR381 と男性 MQ293、女性 RN166 はテレビを見ながらそのテレビ番組について批判を述べている場面である。)

DR381: ben ils ont dix minutes de retard

RN166: bah >comme tout le temps hein<

RN166: M6 aussi hein

DR381: <connards de TF1>

MQ293: <connards>

DR381: et [vas-y]

MQ293: [ils mettent de la pub]=

MQ293: =quand même [ENCORE]

DR381: [ENCORE] des [pu::bs]

→MQ293: [ILS SONT] OUFES CES GENS=

RN166: =>surtout (qu'il va y avoir) trois pubs dans un film d'une heure et demie (quoi)<

(ESLO2_REPAS_1260)

さらに (17) の会話では、この共感性に誘発される *verlan* の使用がより顕著に現れている。→で示した男性 MQ293 の発話の直前で、過大な広告を挿入する某テレビ局にしびれを切らした MQ293 と DR381 がほぼ同時にオーバーラップしながら [ENCORE] と発話しており、そのテレビ局に対する批判的な意見や評価を共有している。そして→で示した発話内で MQ293 は *verlan* の *oufs* によってそのテレビ局を否定的に形容するに至っている。

6.3. 感情的評価性

次に、発話者の感情的な評価、つまり好き嫌いといった強い主観性が伴う場面で *verlan* が使用されている会話データを観察する。この場面は、発話者による感情的な評価を含んだ発話において *verlan* が出現するという点では、前節の「共感性」の *verlan* と共通しているが、この場面は必ずしも発話者と対話者の意見や評価、感情が一致しているわけではない点で性質を異にしている。また、Bucholtz (2007) が、Goodwin and Goodwin (1992) が提唱する評価 *assessment* の理論を引用しながら、「(スラングが) 強い肯定・否定の評価または重い強調といった印象的な立場の表示を伴うコンテキストにおいて、よく使用される⁶」と述べているように、若者ことばとしての *verlan* も主観性の強い発話を標示するマーカーとして機能していることが考えられる。いくつかの例を以下で観察する。

(18)

(以下は男女二人ずつの友人同士による食事の場面での会話である。男性 DR381 は自分たちを形容する言葉を作ることを提案する。それに対し、男性 MQ293 は自分の考えた言葉を述べている。)

DR381: (je veux dire) j'pense qu'on devrait même inventer des mots pour euh nous qualifier (quoi)

RN166: TU CROIS?

DR381: j'pense ouais

RN166: j'pense aussi

DR381: oh ouais c'est la bière de euh i- euh

DR381: [()]

⁶ Bucholtz (2007), p.260. "...it's often used in contexts that involve forceful stance-taking, such as strong positive and negative evaluation or heavy emphasis."

MQ293:[genre magicationnel] tu vois=
 →DR381: =trop *chelou* trop *chelou*
 DR381: [c'est ça?]
 RN166: [magicationnel]=
 MQ293: =ouais
 MQ293: la Despé là
 RN166: [magicationnel >c'est pas mal<]
 DR381: [(mais) j'aime pas la Despé] en fait
 RN166: (t'es) sérieux?
 →DR381: hh >c'est *chelou* (hein)?<

(ESLO2_REPAS_1260)

上記の (18) では、→で示しているように男性 DR381 による *verlan* の *chelou* を含んだ発話が二回観察されているが、ここで感情評価性が関連していると考えられる *verlan* の使用は二回目の方である。網掛けで表示しているように、DR381 は *chelou* の発話の前で la Despé というあるミュージシャンについて、自身の主観的評価を明示している ([(mais) j'aime pas la Despé] en fait)。このように発話者自身の感情的な評価を伴う、換言すれば主観性が強い発話が許される場面では、*verlan* の出現しやすい傾向にある。

(19)

(以下は男女二人ずつの友人同士による食事の場面での会話である。男性 MQ293 が魚を食べることが苦手であることについて、自分の意見と理由を述べている。)

BV647: mais tu aimes rien en fait ?
 RN166: ¥GRAVE [c'est trop ça¥]
 MQ293: [ah] SI NON mais je non si j'aime tout mais euh
 MQ293: j'suis juste pas un grand fan
 MQ293: (y a)des gens qui détestent le poisson
 MQ293: >y a bien des gens qui aiment pas le chocolat<

(1.0)

MQ293: pourquoi pas le poisson?
 →MQ293: le poisson excuse-moi (mais enfin) c'est assez *chelou*

(ESLO2_REPAS_1260)

(20)

(以下も (19) と同様の場面である。)

RN166: et ben c'est bon

DR381: ah ouais c'est bon l'poisson

→MQ293: ouais mais c'est *chelou*=

DR381: =franchement un bon poisson

MQ293: ouais ouais ouais c'est sûr=

MQ293: =non moi j'aime bien hein

(ESLO2_REPAS_1260)

同様に (19) と (20) の会話の場面においても、*aimer* (好きだ) や *detester* (嫌いだ) という評価動詞を含む発話が頻繁に観察されることからわかるように、主観性の高い発話が許容されやすいコンテクストがここでは構築されている。そのため、(19) や (20) の場面では男性 MQ293 が「魚が苦手である」という点で他の対話者たちと意見、評価、感情が一致していないのにも関わらず、→で示した部分において、頻繁に *verlan* である *chelou* の使用が観察されている。

(21)

(以下は男女二人ずつの友人同士による食事の場面での会話である。男性 DR381 の行動について女性 RN166 が言及する場面である。)

MQ293: mais non

(6.0) ((DR381: il a fait du bruit embêtant plusieurs fois))

RN166: mais ARRÊTE t'es chiant

→RN166: [oh c'est *relou*]

MQ293:[il va saturer]

(1.0)

DR381: c'est pour rire

(ESLO2_REPAS_1260)

またこの感情的評価は発話者から対話者に向けられることもある。(21) の会話文においては、男性 DR381 による不快な音を立てるという行動について、まず網掛けの部分で女性 RN166 が *t'es chiant* という表現で DR381 に対する不快感を示した後、さらに→の部分で *c'est relou* という *verlan* を使用した表現によって、自身の主観性の高い評価を強化している。

6.4. 物語性 narration

今回分析した会話データの中には、話し手が自分の経験について聞き手に生き生きと語るために *verlan* を使用している場面が一例のみ観察された。話し手がある出来事を語る際に聞き手をその物語の中に引き込むための、いわゆる劇的な効果、つまり物語性 *narration* に関わる機能を *verlan* が担っていると考えられる。このことは、Méla (1988) が、パリ郊外の若者の語りについて Labov (1974) を参考にしながら、「ある発話者が自らの伝記における重要な部分を構成する経験について語る際、その経験を再び生き、インタビュー時に彼が普通行うような言葉づかいへの注意がもはやできなくなる⁷」と述べていることにも通じている。

(22)

(以下の会話は男性三人と女性一人による友人同士による食事の場面での会話である。男性 DC040 は自身がイギリスで経験したことを他の友人たちに語っている。)

DC040: ça me fait penser quand j'étais en Angleterre

DC040: sur le concert des Pigeon Detectives

→DC040: y avait une *meuf*

DC040: qui avait été placée sur le côté des barrières qui a voulu chop- monter sur le- sur la scène

DC040: ¥*le vigile* il l'a vue¥

DC040: ¥BOUM il lui a mis [un ()] [contre la barrière¥]

FG719: ¥[placage]¥

PF437: [comme euh]=

PF437: =comme la pub avec le footballeur [américain là]

DC040: [mais] *trop ça*

MH56 : () hhh

→DC040: la *meuf* elle s'est mangé la barrière après elle s'est *relevée*/

DC040: elle a voulu se *barrer* le vigile il est *arrivé*

→DC040: BOUM ¥DEUXIÈME TAMPON elle est tombée par terre¥ il l'a ¥DÉFONCÉE la *meuf*¥

DC040: ¥j'ai regardé ma pote (je lui) fais ben je veux *pas* monter sur *scène* hein¥

(ESLO2_REPAS_1265)

この場面における発話者はほぼ男性 DC040 であり、彼が体験した出来事の語りが大部分を占めている。この語りの中で彼は合計三回も *meuf* という *verlan* を使用している。この使用頻度には当然ながら、この物語に登場する女性に対する彼の侮蔑的な姿勢が関連している。しかし同時に、

⁷ Méla (1988), p.61. « lorsqu'un locuteur parle d'expériences qui constituent une partie importante de sa biographie, il revit partiellement cette expérience et n'est plus libre de surveiller son langage comme il le fait normalement dans une interview ».

この *meuf* の使用によって DC040 は、まず自身を再びその経験の中に呼び起こし、それから「自身が経験した出来事をあたかも目の前で見ていたかのように」、聞き手に疑似体験させるを試みている。そのため、語りの間では聞き手である対話者たちからの笑いの反応が見受けられる。

6.5. 場面依存性

最後に、*verlan* の指示内容が発話コンテクストを通してのみ解釈が可能である会話の例を紹介したい。既に 3、4 節で述べたように、例えば *ouf* といった *verlan* の指示内容は中立化される傾向にあるため、話者が *verlan* を使って指示しようとしている具体的なモノやコトは、実際の発話コンテクストを共有していなければ判断が難しい。そのため、会議などの明示性が問われる議論の場ではこうした表現は好まれない。逆に言えば、このような曖昧な表現が暗黙知として許容される場面、つまり話者同士の関係が近かったり、お互いの意思疎通が容易であったりする場合に *verlan* の使用は許容されると考えられる。

(23)

(以下は男女二人ずつの友人同士による食事の場面での会話である。ホームレスが住める空き屋の要請に関して、同意するか否かの質問の回答結果について女性 RN166 が自分の意見を述べている。)

RN166: (hé) >j'ai répondu à s-< à:: la question

BV647: (et) t'as mis quoi? >c'est quoi la question?<

RN166: c'était euh:: êtes-vous d'accord pour euh:::=

MQ293: =la réquisition des:: logements vacants pour (les SDF)

BV647: alors t'as répondu?

RN166: bah oui mais euh=

RN166: =j'ai mis oui et c'était oui à soixante pour cent

RN166: >(tu te rends compte) que y a quand même quarante pour cent <qui sont contre hein=

BV647: =j'avoue

→RN166: c'est *ouf* (hein)?

BV647: >enfin ce matin< y avait soixante-trois pour cent

(ESLO2_REPAS_1260)

この (23) 内の→で示した *c'est ouf* (hein)? という表現は、辞書記述に従うならば「常軌を逸した」「気のふれた」という意味として解釈することができるが、実際に何を指してこのように形容しているかについては発話コンテクストを通してのみ把握が可能である。この会話の場合、ホームレスが住める空き屋の要請に同意するか否かの質問について、→の部分の発話者である女性 RN166 が賛成していること、彼女のように賛成している人が 60 パーセントいること、一方で 40

パーセント人が反対していることを踏まえて初めて、彼女がこの空き屋の要請に反対している人たちの存在を指して、*c'est ouf (hein)?*と形容していることがわかる。

(24)

(以下は男女二人ずつの友人同士による食事の場面での会話である。ある映画に登場するキャラクターの制作期間について女性 RN166 が発話している場面である。)

RN166: tu sais qu'ils mettent un an à faire les poils de Scrat?

RN166: dans u::n Age de glace

(3.0)

RN166: il s'en fout?

DR381: non non=

BV647: =ah d'accord

DR381: mais j'savais pas (que) c'était vraiment à moi que tu parlais (en fait)

RN166: ah si >c'était à [toi]<

MQ293: [un] mois?

(1.0)

RN166: hein?=
MQ293: =un an?

RN166: un an

DR381: >en même temps< y a combien de poils?

→RN166: >j'sais pas mais c'est *ouf*<

MQ293: mais euh pourquoi?

RN166:>[j'en sais rien pourquoi]<

MQ293: [mais c'est juste un]travail de graphiste

(ESLO2_REPAS_1260)

また (24) の会話内では、ある映画に登場するキャラクターの毛を作るのに膨大な時間がかかっていることが話題となっており、→で示した部分で女性 RN166 は *c'est ouf* という *verlan* の表現を発話している。この (24) では RN166 による→の部分での評価がどのように、何に対して行われているのかについて、(23) の場面ほど明確にすることができない。その曖昧性にも関わらず、ここでの会話が途切れることなく継続しているという事実が示しているように、他の対話者たちは各場面での発話された情報のみから RN166 による→の評価について判断しているのではないと考えられる。例えば彼女の性格、話者同士で共有されている思想など、グループ内に存在するある種の暗黙知を通して、彼女の主観的な評価を適切に把握しているのではないか。つまり、ここでの場面依存性とは、*verlan* の指示内容や指示対象が発話コンテキストだけではなく、会話の

話題や誰と会話しているかなどの多様でかつ動的な基準によって規定されるものであることも意味している。

7. 結論

本稿では、フランス語における若者ことば *verlan* が持つ言語創造性の探求を目標に据えて、発話コンテキストの重要性に注目した分析を試みた。具体的にはフランス語話し言葉コーパスを援用しながら、実際の会話に現れる *verlan* の指示内容や使用効果、使用場面について考察を行った。このようなインターアクションの社会言語学に基づいた分析により、結果として *verlan* が使用される場面に、「親密性」「共感性」「感情的評価性」「物語性」「場面依存性」を見出すことができた。また *verlan* の使用と密接に関わり合っているこれらの特性は個別に出現するのではなく、濃淡を出しながら、相互的に重なり合うことで成り立っていると考えられる。そして、この多様な発話コンテキストのグラデーションを通して、若年層に属する発話者と対話者はグループ内での固有の相互行為を達成していると考えられる。そしてこのことは、*verlan* が、フランス全体における「若者ことば」としての言語イデオロギーを持つだけでなく、*verlan* を使用する話者個人が持つ共同体への所属意識またはアイデンティティを構築する上で重要な役割を果たしていることの裏付けにもなる。

8. 今後の課題

まず *verlan* が使用される場面に見られる、「親密性」「共感性」「感情的評価性」「物語性」「場面依存性」という、インターアクションの社会言語学に基づいた特性を十分に整理し、各特性がどのように関わり合っているのかを明確にすることが求められるだろう。また本稿では扱うことができなかったが、間投詞的な *verlan* の使用場面も筆者の経験上観察されることがあり、データ収集を継続的に行いながら、分析に加える必要がある。最後に、今回使用したフランス語話し言葉コーパスの収録年が 2012 年と決して最近のものとは言えないため、現在のフランスでの中学生や高校生による会話から、*verlan* やその他の多様な若者ことばやコミュニケーション・スタイルを示すデータを収集することが課題となる。

参考文献

- BACHMANN, C. & BASIER, L. (1984) : « Le verlan : argot d'école ou langue des Keums? », *Mots*, No. 8, pp.169-187, ENS Éditions.
- BUCHOLTZ, M. (2007) : Word up: social meanings of slang in California youth culture. In Monaghan, L. and Goodman, J. E. (eds), *A Cultural Approach to Interpersonal Communication: Essential Reading*. Oxford: Wiley-Blackwell, pp.243-267.
- DANNEQUIN, C. (1999) : « Interactions verbales et construction de l'humiliation chez les jeunes des quartiers défavorisés », *Mots*, No. 60, pp.76-92, ENS Édition.
- GADET, F. (2007) : *La variation sociale en français*, Paris, Ophrys.

GUMPERZ, J. J. (1982): *Discourse strategies*, Cambridge, Cambridge University Press.

MÉLA, V. (1988) : « Parler verlan : règle et usages », *Langage et société*, 45, pp.47-72, Maison des Sciences de l'Homme.

TENGOUR, A. (2013) : *Tout l'argot des banlieues : Le dictionnaire de la zone en 2600 définitions*, Édition de l'Opportun.

用例出典

ESLO : <http://eslo.huma-num.fr/>

Facebook : <https://www.facebook.com/>

Le Dictionnaire de la zone : <http://www.dictionnairedelazone.fr/>

トランスクリプト記号一覧

[] 2人以上の話者の発話が重なっている部分を示す。

= 前後の発話に途切れがなく続いていることを示す。

(数字) 丸括弧内の秒数の間が空いていることを示す。

(.) 0.2以下の短い間が空いていることを示す。

文字: 音の引き伸ばしを示す。

文字 音の強調を示す。

AAA 音量が大きい発話を示す。

aaa verlan の語彙や表現を示す。

→ verlan の語彙や表現が出現した発話文を示す。

文字- 音の途切れを示す。

>文字< 他の部分に比べて速く発話されていることを示す。

<文字> 他の部分に比べて遅く発話されていることを示す。

¥文字¥ 呼気音を含まない笑いを帯びた発話を示す。

h 呼気音

.h 吸気音

(h) 呼気を含む笑いを示す。

(文字) 聞き取りが困難な部分を示す。

() まったく聞き取れない部分を示す。

((文字)) 転記者による注釈や説明を示す。

(ひない こうすけ / 文芸言語専攻1年)